

「仕事で一番大切にしたい 31 の言葉」という本からです  
 企業は利益を上げ、さらに社会的責任を果たすことである。

(東京電力元社長 木田川一隆)

東京電力で神話として語り継がれているものに、木田川一隆と平岩外四（のちの社長・会長）の「アレコレ問答」がある。木田川から後事を託された平岩は、20 年続いた「アレコレ問答」をこう回想している。〈当時（1956 年）、副社長だった木田川さんの部屋は 3 階にあって、私たちのいる総務部は 2 階だったんです。机の上の電話が鳴ると、木田川さんは一言「すぐに来るように」とおっしゃられるだけで、よけいなことは一切言いませんでした。受話器を置くや、書類を抱えて副社長室に走って行っていました。木田川さんの机の前に立ち「平岩です」というと、木田川さんは机の上の書類から目を離さないで、「アレは、どうなった」と聞かれるのです。具体的な仕事の内容は一切言わずに、「アレ」と言うだけでした。そして、自分で考えて「アレ」の説明を始めるのです。すると木田川さんは「コレだ、ありがとう」とおっしゃって、私の持っていた資料と説明を聞いてくれました〉財界きっての知性派といわれた木田川が師事した人物が「電力の鬼」松永安左工門である。二人の出会いは、戦後の電力再編のときにさかのぼる。発電と送電を一元的に管理する国策会社、日本発送電（日発）と 9 つの配電会社は、過度経済力集中排除法による GHQ の解体要求にさらされていた。電力再編は急務だった。政府は 1949 年（昭和 24 年）に電気事業再編成審議会を設けた。会長に就任したのが、東邦電力（中部電力の前身）の元社長で 73 歳の松永安左工門。松永は九配電のエースたちを参謀に招集した。関東配電（東京電力の前身）から加わったのが木田川である。審議会は幕開けから大荒れとなった。〈委員の三木隆（日本製鉄社長）が年長の彼を「松永君」と呼び「あなたはちょうど私の先輩の平生鉢三郎翁のようだ」と言ったところ、松永は柔和な態度を突然変えた。「あんなものとは違うぞ！ やはりあいつは役人で、ふらりと大臣になったが、オレは役人なぞ大嫌いだ。オレを平生と同じように思うと間違うぞ〉後年、木田川は「(松永ぞ) 財界から出てきた委員にも悪態をつくし、役所にも怒鳴り散らしたので総スカンを食らってしまった」と回顧している。1951 年（昭和 26 年）春にやっと、審議会の案を GHQ が了承した。ポツダム政令によって日発が九分割され、九配電と合併することによって九電力体制になった。再編成をまとめ上げたのは、蛮勇を奮う松永と緻密な木田川の異色コンビだった。木田川は『私の履歴書』の中で、次のように書く。〈翁（松永安左工門）は、発送配電一貫の「東西二大電力会社」を骨子としたが、私達は「九電力案」だった。翁との間に、自由企業でいこうという根本思想においては違いはなかったが、実現方法に対する考え方に調整が必要だった。かくて、松永翁とわれわれ九配電の意見は一致した〉松永と木田川の執念によって、現在の九電力体制が確立したといっても過言ではない。「事業は人なり」を信条とする松永の最後の仕事は、新・民営電力会社を動かす首脳人事。「将来の電力事業を担う人物」と太鼓判を捺した木田川に活躍の場を用意した。1951 年（昭和 26 年）5 月、東京電力が創立。理事営業本部長の木田川はすぐに取り締り役になり、1 年で常務、3 年で副社長へと駆け上がった。だが、1958 年（昭和 33 年）、部下の起こした石炭汚職事件の責任をとり、常務に降格。これは、旧日発と旧関東配電の人事抗争だったといわれているが、一年後、副社長に返り咲く。そして 1961 年（昭和 36 年）松永安左工門の後押しで東京電力の社長に就任。10 年間社長を務め、東電の中興の祖といわれた。クールヘッド・ウォームハート（冷静な頭脳と温かい心）を座右の銘とした木田川は、常に先を見通し、企業の社会的責任、個と全体の調和など次々と提言し、経済界に新しい理論を打ち立てていった。識者たちが「哲人経営者」と高く評価したのはこのためだ。

木田川氏の座右の銘は何ですか？

( )